

人間の運命 第二部

第四卷・夫婦の絆

芹沢光治良

人 間 の 運 命

第二部 第四卷 夫婦の絆

昭和41年10月30日 発行

昭和43年5月10日 3刷

定価 450 円

著 者 芹 沢 光 治 良

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株 式 新 潮 社
会 社

東京都新宿区矢来町71

振 替 東 京 8 0 8

電話東京(260)1111(代)

印刷・株式会社 金羊社 製本・神田加藤製本所
乱丁本はお取替えいたします。

© by K. Serizawa. Printed in Japan

人間の運命

―第二部―

第四卷

夫婦の絆

第一章

ワタシノ父親デス、むっしゅ・どくとうる、ワタシノ父親デス、日本カラ着イタバカリデス。コノ寒イ時ニ、外ハ雪デスノニ――

フランス語を一所懸命に話すのだが、デュマレ博士は聞えないらしく、ただ田部氏の顔を見ているばかりで、握手をしようともしない。

次郎は田部氏が見分を見舞って、はるばる日本から到着したことを、博士に伝えようと、必死に話すフランス語で、われにかえったが、階下でベルが鳴っているようだ。ベッドに上半身を起したが、開放して休む書斎の窓の方は、まだ暗い。六時前にちがいない。ベルがさかんに鳴っている。そのベルで目を覚めたのだろうか、寒くて、降りて行く気にならない。玄関の方へ、誰かようやく駈けて行く気配だ。

――まあ、大奥さま……と、女中の声といっしょに、

――突然さわがせて、お気の毒でしたなも。

と、節子の母の声がして、そのまま階下が静粛にもどった。茶の間にも行ったのであろう

か。

しかし、節子の母が上京するときには、必ず二、三日前から大袈裟に知らせがあって、家中お祭前のように騒ぎたてて待つのが、習慣であるが、予告もなしに、出しぬけに上京したのは、どういふ訳か。よほどのわけがあるにちがいない。それとも、節子の母が上京したのも、現実ではなくて、夢のつづきであらうか。田部氏がスイスの高原療養所に現れるなどということ、夢でなければ不可能だ。新年を遊覧船の上で迎えて、そのままイギリスに行ったぎりまだ帰国しないが、ロンドンに今もいるのであらうか。とうに帰国する筈なのに、今日は十二月一日である。ロンドンは霧が垂れこめて、年とった田部氏には不健康ではなからうか。帰ることを忘れるほど、呆けられたのであらうか。今生の思い出をつくるのだからと、いっしょに世界一周をしようと、あんなに誘ったのだから、同行すべきではなかったらうか。近頃は絵ハガキも届かないが、お宅の方へは便りがあつたらうか。田部氏がスイスの高原療養所を訪ねるとは——なぜこんな夢を見たらうか。デュマレ博士はおこった顔で、灰色の目をじっと向けて答えなかった。結核のことを忘れるつもりで、博士とは無縁だというように、クリスマスカードを送らなくなつてから、三年になる。博士も死んだと思つてか、この二年はカードをくれない。一年以上も、夢のなかに、フランス人も、フランス語も出なくなつて、これでフランスから卒業できたと、思っていたが、あんなに必死でフランス語を喋るとは、やはり未練がましく、心をフランスへおいているのか、それとも、田部氏が健康でも害したという、虫の知らせであらうか——

「丹那トンネルが開通して、記念の第一列車にのせて下さるって、名古屋の駅長さんが特別に、恩田さんの奥さんと、秋葉さんの奥さんと三人に、便宜をはかって下さったので、急に参りましたよ——」

節子の母は次郎の顔を見るなり、元気にそう話しかけて、丹那トンネル第一通過記念というスタンプのある切符と開通記念パンフレットを、有田氏への土産だと見せながら、熱心に話した。

「恩田さんも秋葉さんも、孫の顔を見たかろうと言って、無理にわたしを誘ってくれてね……それに、いつも三人いっしょに駅へ、兵隊を送りに出るので、わたしがいっしょでなければ、お二人も東京へ来れないと言うしね。駅長さんのご親切を無にすることにもなりますし、お父さんには記念品のお土産もありますから……さっき節ちゃんに話したけれど、師団長閣下のお言葉だと言えば、近頃はお父さんも大目に見て下さるから、これからせめて三月に一度ぐらいは、孫の顔を見に来ようかと思えますよ——」

恩田夫人や秋葉夫人の名も、師団長閣下や名古屋駅長のことも、節子の母の口から初めて出たことであるが、結論のようなことをいっぺんに吐き出すので、次郎は理解に苦しみ、幾度も問いかえして、この半年ばかり上京しない間に、有田夫人の生活が変ったことを知った——

二、三カ月前に、名古屋の「母の会」と「婦人会」の主だった婦人が、師団長閣下に招かれて、満州にある将兵の労苦について講話を一席きかされた。その頃、陸軍省の新聞班が、「国

防の本義とその強化の提唱」というパンフレットを発行したが、「たたかいは創造の父、文化の母である」という文章ではじまり、国内の政治や経済機構の改革を、はげしく主張したものであるが、これをすべての新聞が、大きく取りあげ、国防国家建設について世論をおおったが、名古屋師団長も同じ精神で、名古屋の婦人方を激励したのであろう。婦人方は師団長の指揮に従って、しっかりと銃後をまもることを誓い、手始めに、将兵の慰問と将兵の歓送を実行することを約束した。名古屋駅長は、将兵の列車が名古屋を通過する時刻を、いちいち婦人方に通告して、婦人方に入場券を免除した。しかし、将兵ののった軍用列車が名古屋駅を通過するのが、夜半か早朝にきまつていて、しかも、回数が意外に多かったので、一カ月もすると、正直に名古屋駅のホームに集るのは、秋葉夫人と恩田夫人と有田夫人の三人のみになった。

三人とも、大体同じ年頃で、恩田夫人は資産家の未亡人、秋葉夫人は大木綿問屋の夫人、有田夫人は私鉄の社長夫人で、ともに家計に心を煩わすこともなく、何時でもハイヤアを呼んで駅へ駆けつけることのできる身分であるから、お国のためだという考え方も一致して、三カ月もたたない間に、特に親しくなり、たがいに何処へも誘いあうような間柄になって、名古屋駅員なども三人を、兵隊婆さんとか、ホームの三羽鳥とか、蔭で呼んでいた。

有田夫人は元来じみな性格で、出無精であった。有田氏が新舞子の妾宅を根城にして、岐阜の妾宅へは行っても、めつたに顔を見せないような大津町の本宅をまもりながら、妾腹の子供等を育てて、東京にいるわが娘の家を訪ねるのも、周囲に気がねしていた。有田氏が日蓮宗の信者であるために、年に一、二回身延山や日蓮上人にゆかりのある場所へ、有田氏に代って団

体参詣に加わる機会に、節子の処へ寄ることで満足していた。すべて有田氏の意思に従い、有田氏の蔭にかくれて、夫をたてて自己を殺していたが、そのために、賢夫人だと地方新聞に書きたてられたこともある。しかし、秋葉夫人は中京の夫人には珍しく活動家で、有田夫人の境遇に、ひそかに同情したが、夫のために犠牲になるような夫人の日常性には同感できなくて、積極的に將兵の慰問や飲送に誘い出し、「兵隊婆さん」にってしまった。今度も、夫人が半年近く孫の顔を見ないと知って、旦那トンネル開通記念列車にことよせて、独り娘や孫に会わせると同時に、その夜、三人で歌舞伎座でたのしみ、帰名する計画をたてたのだった――

節子の母は夜行列車の疲労もないような表情で、次郎に話した。

「お父さんが最近師団長閣下にお目にかかった時、婦人会のことでお礼を言ってたそうで、これで仕事がしよくなったなんて、喜んでいましたよ。だから、兵隊のことでわたしが家をあけても、文句がありません。今度も秋葉さんと恩田さんと東京へ行くからと、会社へ急に電話したところ、節子の処で骨休めして来なさいなんて、言っていましたからね」

有田夫人の話から、次郎は東京をはなれた名古屋のような地方都市では、すでに陸軍の意思が市民生活に強い影響を与えていることを、考えるべきであったが、旦那トンネルの開通によって、東海道線が一時間の短縮をしたということから、沼津へは三時間ばかりで行けることを思い、田部氏の別荘を訪ねて消息をきかなければと、そればかり考えていた。それほど、その朝の夢が気にかかったが、また、田部氏から便りがなかったからでもある。

その午後、次郎が庭で習慣の仰臥療養をすませて、書斎にもどると、節子の母が待っていた

かのように、紅茶をもって上つて来て、有田氏が上京したならば、次郎から忠告してもらいたいことがあるからとて、思いつめた表情で、書斎の隅の応接椅子にかけた。

有田氏が相変らず麻雀にこつて、会社の課長や部長に相手をさせるために、会社の人々がみな麻雀にこり、家庭をかえりみなくなつて困るから、会社の関係者とは、麻雀をしないように、次郎から説得するようにとのことであつた。實際、有田氏は月に二、三回社用で上京する時にも、きまつて三人の社員を伴つて、次郎の家に泊ることにしているが、必ず一日は骨休みのように終日麻雀をして、徹夜さえする。そのことを、次郎もころよく思わなかったが、しかし、今日では有田氏をすでによその世界の人として、無視することになっている。

「ぼくが話しても、きくようなお父さんではありませんよ」

「いいえ、次郎さんの言うことなら、きつとききますよ。お父さんには、次郎さんの他に、こわい人はありません。次郎さんにはずいぶん遠慮しなざるから——」

「それがほんとうなら、此処で麻雀なんかできないはずですけれど……お母さんも麻雀ぐらい、大目に見ていられるでしょう」

「麻雀が独りでやれるものならば、ね。会社の者を誘わなければ、問題にしませんけれど……いつも賭けているようですが、会社の者は社長のご機嫌をとるために、わざと負けたりするそれで……それも、月には、ばかにならない金高になつて、家庭の平和を乱したりして……おまけに、部長さんのなかには、お父さんを見ならつて、外に女をかこう人もできたりしてね……社長なら社員の模範になつてもらいたいけれど、次郎さんから話してくれませんか」

「ぼくが結婚前だったら、耳を傾けてくれたかも知れませんが、今では、この朴念仁がつて、気の毒そうな顔をするだけでしょね、お父さんて、そんな人ではありませんか……こんなことを今更、お母さんが言い出すなんて、おかしいですよ。それに、もう手おくれですものね」

有田夫人はしばらく次郎の顔を見上げて黙っていたが、情けないような表情をして言った。

「次郎さんは誤解なさったかも知れませんが……お父さん独りのことなら、わたしは何も申しませんよ。一生そうやって来ましたから……お妾を幾人持とうが、不品行なことをしようが、ありがたいことに、世の中でも問題にしませんでしたが、今はちがいますから——」

「どうちがいますか」

「近頃婦人会で、師団長閣下やえらい将校方にお会いして、知ったのですが……これから世の中はむずかしくなるそうですね。だから、銃後をしっかりまもるようにと、お話があるのですが、家庭を乱すような人間は、敵のようなものだと思しやるのですよ。お父さんの仕事も、これから軍人ににらまれたらば、やりにくくなるではありませんか。それなのに、お父さんのしていることは、軍人の目からは不品行で、敵視されるのではありませんかね……特に、会社の部長さん方まで、麻雀にこったり、女をかこったりするようなことがわかれば、社長であるお父さんの悪影響だと言って、責任を問われると思つてね——」

「お母さんが兵隊を見送りに出るのも、お父さんのためですか」

「いいえ、兵隊はみんな成夫より若い人々ばかりで……なんです、他人だと思えなくなつて

ね。駅まで出て励ましてやりたくなるのですが……兵隊を見送ったり、慰問したりしていると、師団長閣下などの仰しやるのが、ほんとうだと、身にしみて……お父さんのことが心配になって、ね。今度も孫の顔を見るというより、次郎さんから忠告してもらいたくて、東京へ来る決心をしましたよ」

次郎はまだ自分の日常生活には、さして感じない軍の意思と圧力とが、名古屋の市民生活にはもうそれほどの逼迫感をもっているのかと、近頃の新聞論調と考えあわせて、初めて肩をすぼめる思いがした。つい二、三日前に一郎がよって、各新聞が軍部の圧力によって、世論をおっているが、さすがにA新聞だけは黙殺していたところ、陸軍当局から注意を受けたと、眉をひそめていたことを思い出した。

「お父さんは耳のいたいことを言われると、いつもおこって逃げますが、次郎さんから言われると、いやな顔をしても、必ずあとで考えなおしますよ。ですから、おいやでも、説得してやって下さい、お頼みします」

そう有田夫人は言い残して、恩田夫人達が歌舞伎座で待っているからとて、急いで出て行った。

丹那トンネルが開通して、沼津へ日帰りもできるようになったから、次郎はすぐにも田部夫人を別荘に見舞って、田部氏の消息をきこうと念じながら、新年原稿があつて果せなかった。

田部氏から便りはないが、今度の正月（昭和十年）は日本で迎えるものと、独りきめてい

た。それには、すでにロンドンかマルセイユかで乗船したはずであるが、いつ横浜に着くか、夫人には知らせがあつたのではなからうか。夫人に夢のことを書き送つてたずねようと考えたが、それも面倒でしなかつた。一体田部氏はどこにいるのだろうか、ふと不安に襲われる時もあった。

十二月には珍しく風のない暖かな日、午後の仰臥椅子をヒマラヤ杉の蔭に持ち出して休んでいると、門の石段に軽く駒下駄の音がして、葉を落した古楓の横から、小柄な田部夫人が笑いかけた。

「やはり次郎さんはいましたね。この時間なら、きっとお庭でしようと思つてたけれど——」「ペールはいつの船にのりました？」と、次郎ははでな色の膝掛けをはねのけて、立ち上つた。

「え、次郎さんにはそんな便りがありましたか」

「だって、正月は日本の予定ではなかつたですか——ペールはぼくのアドレスを忘れたのですかね。ひどいもんです。沼津には何か通知がありませんか」

「ありましたよ、それが、送金しろですって——」

「送金って——まだ乗船してないんですか。そんなにイギリスが気に入ったんですかね、困つたものだな、帰国するのを忘れるなんて——」

「それでうかがつたんですよ……あの年で、独りで、外国で、不自由ではありませんかね」

そんな話をしながら、次郎は階下の洋間に案内した。夫人は節子に、丹那トンネルが開通し

て便利になったし、富士山の見える座敷もできたからと、みんなで沼津の別荘へ来るように、熱心にすすめたが、田部氏のことが心配らしく、気もそぞろで、すぐに田部氏のことを持ち出した。

「すぐまとまった金を送れって、言うでしょう……有価証券か不動産を処分しなければならぬのなら、前の支配人の横田老人と次郎さんに意見をきくようにって、注意がありましたから、横田さんの中野のお宅にあがって、その帰りですけれど……勤さんね、次郎さんと一高時代から同級生でしたわね。只今、M銀行のニューヨーク支店だそうで、ゴルフにこつていって、お二人とも、写真を見せて自慢していましたが……次郎さんがあの時、名実ともに養子になってくれていたら、ペールだって、あの年で独り外国にうろろしてないだろうと、つくづく思いましたよ。それが、ロンドンとばかり思っていたところ、今度の送金は正金銀行のパリ支店へはらいこむように言うでしょう？ 連絡先も日本郵船のパリ出張所にするように書いているんですよ。ロンドンは霧が多くなったので、気候のいいフランスへ移ったと言うけれど、それならば、そのまま日本へ帰ればいいじゃないやありませんか……それで、次郎さんにお願ひですが、ペールに帰国をすすめてくれませんか、郵船のパリ出張所気付で……それから、たしか、親友がパリにいましたね」

「大塚がいまずよ」

「大塚さんでしたわね、大塚さんに頼んでくれませんか、ペールに会って、ペールがどんな暮らし方しているか、どんなつもりでいるのか、きいてみるように……わたしは心配で落着いて

「いられません」

「送金はなさらないのですか」

「お金だけがたよりでしょうからね。次郎さんも知っていたでしょう、銀座の田丸さん、国旗のおろしをしていた……田丸さんのお店は、三十年近く自家の借家でしたが、震災のあと、田丸さんが焼あとにさつさと家を新築して、その後もずっとお家賃を届けてくれましたが……古い店子だからと言って、そのままにしていたが、二、三年前から、地上権をゆずって欲しいと申出ていたようですが、ペールはご存知のような呑気者でしょう……ところが、満州事変以来、国旗がよく売れるんですってね。田丸さんもたくさんうるおったそうで、この際、是非ゆずって欲しいと、熱心なお話で、申出た額も、ペールが前に話していたよりもずっと多いし……今日も横田老人が手放す時期だからと申すので、一切たのんで来ました。みんな正金銀行に入れて、ペールが必要な時に、必要なだけ渡してもらえようにして下さるそうで……その点は安心しましたが」

「すると、ペールはまだなかなか帰る気にならんですかね」

「あのとおりの変人でしょう……何を考えているのか、いつも簡単な絵ハガキで……それも送金のこともなければ、くれないですからね。だから、次郎さんにお頼みに上ったんですが……近頃しらべて見て知りましたが……あの人は幾年も日記をつけていて、メモ代りだなんて言っておりましたが、丹念に書いていたのが、この数年分が、みんなないのです。持って行ったとしか考えられないけれど、何ですか、心配で——」

「心配って、心配になるような心当りでもあるんですか」

「横のものを縦にもしない、世話のかかる人でしよう、ですから、威張って外国へ行っても、不自由だと言って、すぐ帰国するものと、たかをくくっていましたけれど、予定が一年近くのびても、帰る気配がないでしょう？　不思議です。一体何を考えて外国へ出かけたか、知りたくて、日記を読んでみようとしたら……この数年分を持ち出しているんですもの。心配するのが当然でしょう？　次郎さんは何か秘密を知ってるのではありませんか」

「いいえ」

「今日も横田老人に言われました、わたしが強引に次郎さんを学生時代に養子にできなかったからいけないって……それでは、この年になって、お父さんがわからなくなるのですが……だって、子供のないことを、女のわたしが我慢できているではありませんか」

「ねえ、フランスへ行ってやって下さい、お母さんが……お金もできたんですし、お父さんはきっと喜びますよ」

そう思わず言葉が口をついて出た。戸惑った表情で、黙ってしまった夫人に、次郎は熱心に話した。

「お父さんが、郵船のロンドン支店時代に、お母さんもごいっしょで……ヨーロッパをあちこち旅行したでしょう？　三十数年後、二人で曾遊の地を訪れるなんて、すてきですよ。若い時には感じなかったことや気のつかなかったことを、きつとたくさん発見して、若返りますよ。お父さんだって、お母さんがごいっしょならば、共通の思い出があって、何処を歩いても、興